様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月１７日現在

研究種目： 若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号： 19730386
研究課題名（和文）　対人ストレスと文化的要因の関連
研究課題名（英文）　Cultural influence on interpersonal stress process

研究代表者
橋本　剛　（HASHIMOTO TAKESHI）
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号： 60329878

研究成果の概要（和文）：
日米の大学生を対象とした調査に基づいて，対人ストレッサーの経験頻度，およびそれらが心理的健康に及ぼす影響の文化差を検討した。その結果，他者への依存や他者を気遣っての本心抑制によるストレスは，アメリカ人よりも日本人の方が経験しやすく，それらの文化差はパーソナリティやソーシャルスキルによって部分的に媒介された。対人ストレスの心理的健康に対する悪影響は部分的に日本の方が強かったが，基本的には両文化で共通していた。

研究成果の概要（英文）：
This research examined the cultural influence on frequency of interpersonal stress experiences and its aversive effects on psychological well-being by questionnaires toward undergraduates in Japan and United States. As a result, interpersonal stress caused by overdependence toward others and inhibition of assetiveness is more frequent in Japanese than in Americans, and this cultural difference was partly mediated by social skills and personality. Aversive effects of interpersonal stress on psychological well-being were generally common in both culture, though partly more salient in Japanese than Americans.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,100,000	0	1,100,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	540,000	3,440,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：文化，対人ストレス

１．研究開始当初の背景
(1)児童・生徒の暴力やいじめ，青年の対人不適応，晩婚化・未婚化の背景にある対人リスク回避志向，中高年の自殺の背景にある人間関係の軋轢など，現代日本社会が抱えている重大な諸問題は，対人ストレスの問題でもあるという共通項がある。それらの対策として，カウンセリングなどの対処療法のみでは不

十分であり，対人ストレスの生起およびそれに伴う不適応を抑制するような社会を構築するための試みも，少なからず必要であると思われる。

(2)そのためにはまず，対人ストレスの具体的様相を把握・理解することが必要である。この点に関する先行研究(橋本,1997,2005a,2005b）においては，ストレッサーとなりうる対人的相互作用が，大まかには，(a)ケンカや対立など，他者から敵対的な態度・行動を受ける「対人葛藤」；(b)自身の落ち度や消極性によって他者に不快感をもたらす「対人過失」；(c)対人関係の紛糾を回避するために，あえて意に添わない行動に従事し，期待はずれを黙認する「対人摩耗」；という３類型に分類されることが明らかにされている。これらの規定因は類型毎に異なると推測されるので，ストレッサー生起やストレス深刻化を制御するために，今後はそれぞれの規定因を明確化することが必要である。

(3)そして，これら対人ストレスの規定因として，文化も重要であると考えられる。文化が対人関係の諸相と双方向的に関連するという先行研究の知見（北山，1998；Markus & Kitayama,1991；Triandis,1995）が対人ストレスについても適用されるならば，日本を含むアジア圏では，相互協調的自己観・集団主義に由来して，対人葛藤の回避規範が強く，それに反比例する形で対人過失・対人摩耗の経験頻度が高くなると推測される。一方で，相互独立的自己観・個人主義に特徴づけられる欧米圏では，いわゆる「空気を読む」かのような対人摩耗型コミュニケーションは生じにくいであろう。これらの可能性を明らかにすることは，現代日本人における対人関係の諸問題が何に由来するのかを客観的観点から明確化し，今後の日本社会が目指すべき方向性を探る上で，有益な指針を提供しうると考えられた。

２．研究の目的

(1)上述の背景に基づいて，本研究では日本とアメリカを対象とした調査研究を通じて，対人ストレッサーの経験頻度やインパクトを規定・調整する要因としての文化が果たす役割について検討することを目的とした。具体的には，「（先行研究で見いだされた）対人ストレッサー類型の文化的普遍性／独自性」，「各種対人ストレッサーの生起頻度やインパクトの文化差」，「それらの文化差を規定・媒介・調整しうる要因」の３点について明らかにすることを目的とした。

(2)まず「対人ストレッサー類型の文化的普遍性／独自性」について，対人葛藤・対人過失は，（方向性こそ違うものの）ともに「規範からの逸脱」という共通点があるので，通文化的にストレッサーとなりうると推測された。しかし対人摩耗は，相互依存性や高コンテキスト文化に由来する日本独自のストレッサーであり，アメリカのような文化では認識されにくい可能性も考えられた。

(2)次に「対人ストレッサーの生起頻度やインパクトの文化差」については，欧米圏における相互独立的自己観や個人主義と，アジア圏における相互協調的自己観や集団主義との対比から，「対人葛藤の経験頻度に文化差はないが，対人過失や対人摩耗の経験頻度はアメリカより日本の方が多いであろう」，「対人ストレッサーのインパクトは全般的にアメリカよりも日本の方が強いであろう」といった仮説が想定された。

(3)さらに「対人ストレスの文化差を規定・媒介・調整しうる要因」については，さまざまな要因が想定されうるが，本研究ではパーソナリティ（特に行動抑制システム：BIS），ソーシャルスキル，そしてアタッチメント・スタイルに注目した。

３．研究の方法

(1)本研究では，先行研究で指摘されている文化心理学的要因，すなわち文化的自己観や集団主義／個人主義などが，対人ストレスの文化差の背景にあると想定した。そこで，相互独立的自己観や個人主義によって特徴づけられる文化的背景を有すると想定されるアメリカと，相互協調的自己観や集団主義によって特徴づけられる文化の代表格である日本の比較を中心として，本研究の主たる論点について検討することとした。

(2)まず，日本人サンプルを対象とした先行研究（橋本，1997，2005a，2005b）によって見いだされた対人ストレッサー３類型（対人葛藤，対人過失，対人摩耗）が通文化的に適用されうるという本研究の基本的前提を確認するための予備研究として，日米の大学生を対象として，対人ストレッサー経験に関する自由記述調査を実施した。この研究は，ミシガン大学文化心理学研究室の協力を得て実施された。

(3)次に，上記の予備研究において対人ストレッサー類型が基本的に通文化的であることを確認した上で，全般的対人関係における対人ストレッサーの経験頻度およびそれらが心理的健康に及ぼす影響の文化差，さらにそれらの文化差を規定する要因を明らかにするための日米比較調査を実施した。この研究は，カリフォルニア大学サンタバーバラ校

文化心理学研究室の協力を得て実施された。

(4)また，親密性による対人的相互作用の差異にも文化差があるという先行研究の知見を踏まえて，対人ストレスに対する親密性と文化の交互作用的影響についても検討を加えるために，親密性を設定した特定対人関係における対人ストレッサー経験頻度およびそれらと心理的健康の関連の文化差，さらにそれらの文化差を規定する要因についての日米比較調査も実施した。この研究は，名古屋大学教育発達科学研究科およびニューメキシコ大学コミュニケーション学部の協力を得て実施された。

(5)さらに，これら一連の日米比較調査においては扱われなかったが，対人ストレスの文化差に関連しうると思われる要因のひとつとして，アタッチメント・スタイルが挙げられる。これについても，調査対象は日本人のみとなったが，補足的に調査を実施した。

４．研究成果

(1)予備研究として実施された日米学生の対人ストレッサーに関する自由記述調査では，主たる知見として以下の点が見いだされた。

①日米ともに対人ストレッサーの種類は概ね先行研究から想定された３類型に基本的に対応していることが確認された。すなわち，対人ストレッサーは大まかには，対人葛藤（葛藤，批判，軽視，誤解），親密性欠如（親密性欠如，孤立，喪失），対人摩耗（困惑，自制，噂，関係形成）の３種類に分類された。

②それらの出現頻度において，対人葛藤に文化差はなかったが，親密性欠如はアメリカが，対人摩耗は日本が，それぞれ有意に多かった（表１）。これらの文化差は，アメリカ人の対人ストレス認識が基本的には親和欲求によって規定されるのに対し，日本人のそれは回避欲求によって規定される可能性を示唆している。

表１　文化ごとの対人ストレッサー各類型記述数

	対人葛藤	親密性欠如	対人摩耗
アメリカ	32	18	8
日本	21	4	24

(2)全般的対人関係における対人ストレスの文化差に関する日米比較調査では，以下の知見が明らかにされた。

①対人ストレッサー生起頻度に関しては，仮説通り，対人葛藤は文化差がなかったが，対人過失と対人摩耗はアメリカ人よりも日本人の方が有意に経験しやすかった（図１）。

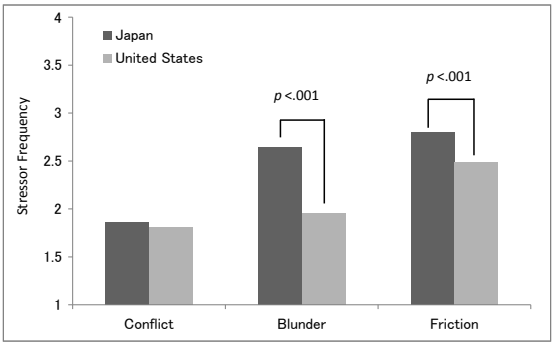
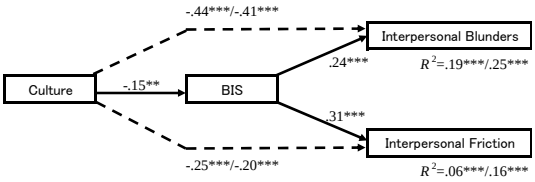


図１　日米の全般的対人関係における対人ストレッサー生起頻度

②対人過失と対人摩耗の文化差は，部分的に個人差要因としての行動抑制システム（Behavior Inhibition System : BIS）によって媒介された（図２）。すなわち，日本人はアメリカ人に比べてBISが高く，それが対人ストレッサー経験頻度の文化差を部分的に規定していた。



NOTE: Solid lines represent mediational paths by BIS and broken lines represent direct paths of culture.
Culture was coded as Japan = 1 and the U.S. = 2.
R^2 and Beta of culture on stressors represent these effects before (left) and after (right)

図２　BISによる対人ストレッサー媒介モデル

③対人ストレッサーが心理的健康に及ぼす悪影響の文化差については，対人葛藤についてのみ，日本人でその悪影響が有意であったがアメリカ人で有意でなかった（図３）。したがって，アメリカ人より日本人の方が対人ストレッサーの悪影響を受けやすいという仮説は，部分的な支持に留まった。このことは同時に，対人過失と対人摩耗という日本的な対人ストレッサーがアメリカ人にとっても悪影響を及ぼしうることを意味しており，これは対人葛藤を中心としたアメリカの対人ストレス研究に一石を投じる知見と言えよう。

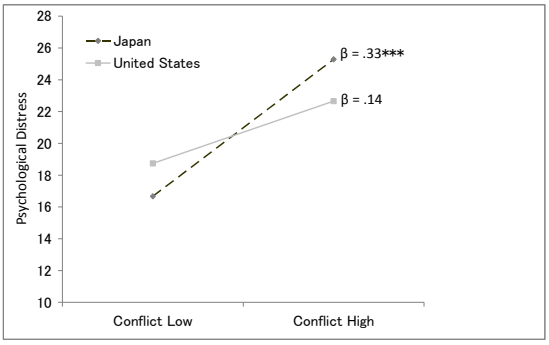


図３　対人葛藤と文化による心理的ディストレス

(3)親密性要因を加味した，特定対人関係にお

ける対人ストレスの文化差に関する日米比較調査では，以下の知見が明らかにされた。
①文化と親密性による対人ストレッサー経験頻度について，対人葛藤は日米ともに高親密関係より低親密関係の方が多く，対人過失はアメリカより日本が，低親密関係より高親密関係がそれぞれ多く，対人摩耗は日本の高親密関係のみ相対的に少なかった（図４）。

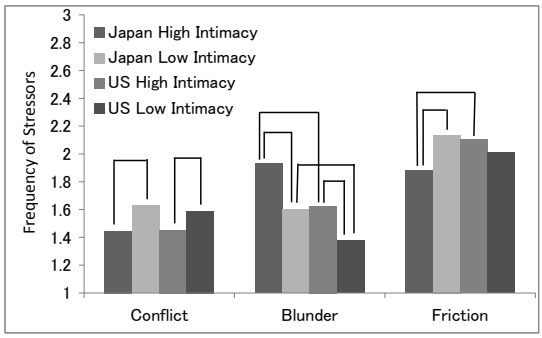


図４　文化と親密性による対人ストレッサー経験頻度

これらの結果は，文化，親密性，そしてストレッサーの種類による３要因の交互作用として対人ストレッサーの経験頻度が規定されることを示している。
②高親密関係における対人過失についてのみであるが，その文化差に対するソーシャルスキルの媒介効果が有意であった。
③高親密関係における対人葛藤頻度とスキルの関連について，アメリカでは高スキルほど低頻度という負の関連が示されたが，日本ではそのような関連は示されないという調整効果が見いだされた。
④対人ストレッサーとストレス反応の関連について，高親密関係の対人ストレッサーについてのみ，アメリカより日本の方がストレス反応との関連が強いという文化差が見いだされた（図５）。

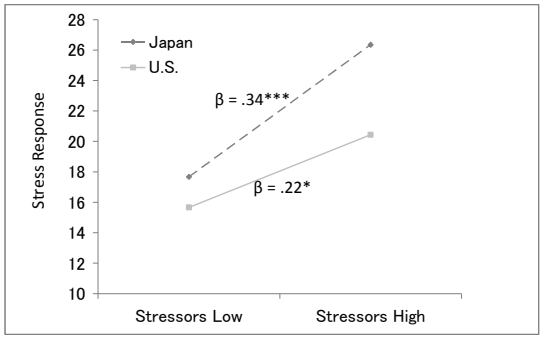


図５　高親密関係のストレッサー頻度と文化によるストレス反応

(4)補足的研究として日本人を対象に実施された，恋愛関係における対人ストレスとアタッチメント・スタイルの関連についての調査では，以下の知見が見いだされた。
①アタッチメントの指標として３類型モデルを用いた際には，アンビバレント型アタッチメントが対人過失と，回避型アタッチメントが対人摩耗と，それぞれ有意な正の相関を示した。
②アタッチメントの指標として２次元モデルを用いた際には，関係不安が対人過失と，親密性回避が対人摩耗と，それぞれ有意な正の相関を示した。これは上記３類型モデルと合致する結果である。
③さらに相互協調的自己観が関係不安，対人過失，対人摩耗と有意な正の関連を示したことから，日本人における対人過失や対人摩耗の多さは，相互協調的自己観に由来する関係不安もしくはアンビバレント型アタッチメント・スタイルの媒介効果によってもたらされる可能性が示唆された。

(5)さらに本研究の副産物的成果として，対人ストレスと文化の関連にまつわる先行研究レビューが，2010 年 4 月刊行の書籍「対人関係とコミュニケーション」（誠信書房）の第 10 章「対人関係のストレス」に部分的に援用された。ここでは対人ストレッサーの認知，対人ストレス直面時の情動的反応，対人ストレスへの対処という 3 側面において文化が調整要因となる可能性が指摘され，対人ストレスと文化の関連可能性にまつわる研究をさらに進展させるための指針が呈示された。

(6)以上の研究成果は，概ね本研究で想定された目的を達成し，仮説を支持するものであった。その概要と今後の展望については，以下のようにまとめられよう。
①まず，対人ストレッサーの経験頻度の文化差およびその規定因については，アメリカ人よりも日本人の方が対人過失や対人摩耗を経験しやすく，その文化差が BIS やソーシャルスキル，アタッチメントなどの要因によって部分的に媒介されることが確認された。しかし，それらの個人差要因による媒介効果は限定的であり，対人ストレッサー生起頻度の文化差を理解するためには，さらにソーシャル・ネットワークや社会システムなどの社会環境的・外的要因について検討を重ねる必要があるだろう。
②次に，対人ストレッサーが心理的健康に及ぼすインパクトの文化差については，対人葛藤のインパクトがアメリカ人よりも日本人にとって顕著であるという仮説通りの結果に加えて，対人過失や対人摩耗が日本人のみならずアメリカ人にもネガティブな影響を及ぼすという知見が見いだされた。このことは，対人葛藤タイプのストレッサーを中心としたアメリカ流の対人ストレス研究における盲点をつくものであり，海外の対人ストレス研究に一定のインパクトを与えうる知見

であると思われる。同時に，これらの対人ストレッサーのインパクトが通文化的であることから，これらのストレッサーのインパクトを抑制するような社会文化的環境の構築は論理的には難しいと考えることもできよう。したがって，対人ストレスの悪影響を防ぐためには，それが生起してからの対応を考えるよりも，対人ストレスの生起そのものを抑制しうる社会文化的環境を構築するような方略を模索することが，一見遠回りのようで実は有効なのではないだろうか。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①橋本　剛，看護師の対人ストレッサーとバーンアウトの関連，人文論集（静岡大学人文学部），査読無，５８巻（１），2007，19－47

〔学会発表〕（計１２件）
① Hashimoto, T. & Kim, H. S., *Cultural Differences in stressor frequency and influences on distress in Japan and the U.S.* Poster session presented at the 11th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2010.
②矢崎裕美子，吉田琢哉，森泉　哲，高井次郎，橋本　剛，何が対人関係のストレスをもたらすのか（４）―対人ストレス過程に対する規範とスキルの効果―，日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会発表論文集, 2009, pp.998-999.
③高井次郎, 吉田琢哉, 矢崎裕美子, 森泉　哲, 橋本　剛，何が対人関係のストレスをもたらすのか（３）―関係満足感，有能感への影響―，日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会発表論文集，2009，pp.996-997.
④吉田琢哉，矢崎裕美子，森泉　哲，高井次郎，橋本　剛，何が対人関係のストレスをもたらすのか（２）―対人規範意識およびソーシャルスキルと対人ストレッサーとの関連―　日本心理学会第 73 回大会発表論文集，2009，p.98.
⑤橋本　剛, 吉田琢哉, 矢崎裕美子, 森泉　哲, 高井次郎，何が対人関係のストレスをもたらすのか（１）―関係の種類と親密性，対人ストレッサーの種類による検討―，日本心理学会第 73 回大会発表論文集，2009，p.97.
⑥Hashimoto, T., Kitayama, S., & Imada, T., *Porcupines in the crowd and in the wilderness: Stressful social interactions in Japan and the US?* Poster session presented at the 10th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2009, p.392.
⑦橋本　剛，分析的－包括的思考尺度日本語版作成の試み，日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集，2008，pp.266-267.
⑧橋本　剛，中山　真，恋愛とストレス関連成長（２）―恋愛関係のストレスは成長をもたらすのか―，日本心理学会第 72 回大会発表論文集，2008，p.202.
⑨中山　真，橋本　剛，恋愛とストレス関連成長（１）－成長をもたらすのは関係の形成か，維持か，崩壊か－，日本心理学会第 72 回大会発表論文集，2008，p.201.
⑩橋本　剛，恋愛関係における愛着スタイルと対人ストレス（２）－文化的自己観を含んでの縦断的検討－，日本グループ・ダイナミックス学会第 55 回大会発表論文集，2008，pp.160-161.
⑪橋本　剛，今田俊恵，北山　忍，日米における援助要請傾向－日常的援助と専門的援助の両側面から－，日本心理学会第 71 回大会発表論文集，2007，p.74.
⑫橋本　剛，恋愛関係における愛着スタイルと対人ストレス，日本グループ・ダイナミックス学会第 54 回大会発表論文集，2007，pp.158-159.

〔図書〕（計２件）
①橋本　剛（相川　充・高井次郎編著），誠信書房，対人関係のストレス（コミュニケーションと対人関係），2010，pp.170-189.
②橋本　剛，サイエンス社，大学生のためのソーシャルスキル，2008，245.

６．研究組織
(1)研究代表者
橋本　剛（HASHIMOTO TAKESHI）
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：60329878